



狩猟をしながら地域の魅力を 発掘・発信

貝田真紀

(北秋田市地域おこし協力隊)

1 地域おこし協力隊になるまで

○「秋田」は親の出身地

はじめまして、北秋田市地域おこし協力隊の貝田真紀と申します。地域おこし協力隊に着任してから2年が経過し、2022年9月からは最後の任期となる3年目に突入しました。出身は福島県いわき市で、父親が秋田市出身、母親が沖縄県的那覇市出身なので、秋田には父親の帰省の付き添いでよく滞在していました。父親が定年退職後に福島から秋田市に戻ったので、10年前から帰省先も福島から秋田に変わり、以前よりも秋田に来る機会が増えました。

父親は60歳を過ぎてから男鹿でパラグライダーを始め、母親と一緒にガーデニングに勤しみ、実家の庭はいつの間にかバラ園になっていました。庭を一般に開放する「オープンガーデン」のイベントを夫婦で運営したりもしているので、楽しそうな老後で良かったなと思っていたのですが、自分が秋田で暮らすことになるとは思っていませんでした。私にとって「秋田」は親や親戚が住んでいる地域であり、「帰省先」でしかなかったからです。

○飛行機通勤を早々にギブアップ

研究者になることを目指して大学院の博士課程に進み、比較政治学やロシア現代政治の研究をしていました。大学や研究の仕事の関係で茨城や東京、神奈川、ロシアのモスクワやサンクト・ペテルブルクに移り住む生活が続き、自分は今後も首都圏や海外の都市部で生活していく

のだと考えていました。そんな中、外務省で専門分析員の仕事をしている時に、国際教養大学（以下、A I U）の非常勤講師の仕事の依頼があり、週に1回秋田市のキャンパスに飛行機通勤をすることになりました。

人生の選択に迷った時は「困難な道を選ぶべし」と高校の先生が言っていたので、素直に飛行機通勤の道を選んでみたのですが、大学の授業はそれなりの準備が必要で、霞ヶ関での専門分析員の仕事もそれなりに疲れる仕事だったので、両立は不可能だと早々に判断し、大学の仕事のために秋田市の実家に引っ越しました。

○パラサイト生活と新型コロナウイルス

A I Uで非常勤講師の仕事をしながら、実家の両親にパラサイトして生活していたのですが、中年になってからの実家でのパラサイト生活はあまり居心地の良いものではなく、直ぐに脱出したくなりました。そんな中、新型コロナウイルスの感染が世界中に広がり、都市部を中心に日本でも感染が拡大したので、首都圏には戻りづらい状況となりました。当時はワクチンも開発されておらず、後遺症についても未知の部分が多かったので、首都圏に戻るにしても、海外に出るにしても適当な時期とは思えなかったのです。

○とりあえず実家から脱出

実家でのパラサイト生活から脱出するために、秋田県内でフルタイムの仕事を探したところ、北秋田市の「地域おこし協力隊」のお仕事を見

つけました。北秋田市は祖母の出身地で訪れたこともありましたが、以前から狩猟に興味があったので、マタギで有名な北秋田市は任地として適しているように思えました。また、これまでの人生は常に挑戦の連続だったので、田舎で少しのんびりするの也不错かもしれないと思いました。このような経緯で、志のあまり高くない「地域おこし協力隊」としての生活が始まりました。

2 地域おこし協力隊としての活動

○移住定住促進のミッション型

志はあまり高くなかったものの、仕事を頑張るのは当然だと考えていたので、いろいろな活動を展開してきました。地域おこし協力隊の活動内容は受け入れ自治体に委ねられており、北秋田市は特定の仕事を与える「ミッション型」になります。全国的には、自治体が協力隊に課題を与えない「フリーミッション型」方式を採用している場合もあります。

私が着任した2020年9月当時は、総合政策課の移住定住支援室と商工観光課の観光振興係が協力隊の受け入れ組織で、それぞれ「移住コーディネーター」と「観光コーディネーター」という肩書きで協力隊にミッションを与えていました。私の所属先は移住定住支援室で、移住コーディネーターとして移住希望者のサポート業務を行うことが主なミッションになっています。協力隊は外部人材で都市部からの移住者なので、その視点を活かしながら移住者を支援することが期待されているようです。具体的には、移住体験のガイド役を務めたり、移住体験の内容を企画したり、移住体験住宅の管理等を行っています。

○狩猟免許を取得して猟友会に入会

「移住コーディネーター」としての役所のお

仕事は、移住希望者が市外から来てくれないと始まらないので、毎日業務がある訳ではありません。空いた時間は、協力隊個人の地域おこしに関する活動や定住のための準備に充てられることになります。私は「マタギ文化の発信」を協力隊の活動にしようと考えていたので、1年目に狩猟免許を取得し、猟友会に入会し、銃の所持許可を取得して猟銃も購入しました。

肝心の射撃の腕前はイマイチですが、狩猟に同行させてもらい、熊の解体等の貴重な体験をさせてもらいました。こうした狩猟活動の様子は、FacebookやInstagram等のソーシャルネットワークで定期的に発信しています。マタギ文化のPRのために、「マタギ君」というゆるキャラのLINEスタンプを、同僚の協力隊と一緒に作って販売したりもしました。



マタギ君のLINEスタンプ

○マタギに惹かれて移住を希望する若者

狩猟の活動は情報発信の素材としてだけではなく、マタギに惹かれて移住を希望する方々への対応にも非常に役立っています。意外かもしれませんが、漫画やアニメの影響で「マタギ」の認知度は上がっているようで、マタギになりたくて移住を希望する若者や、論文の調査のために訪問してくる学生が何人もいました。

彼らに狩猟免許の取得の仕方や、猟友会の特

徴、狩猟や解体の体験談をお伝えすることができているので、狩猟の活動は役所の業務にも活かしています。これは、当初は想定していなかった副効果でした。



春熊猟で仕留めた熊を運ぶ様子

○永沢碧衣さんの「マタギ×アート」の世界

狩猟を通じて永沢碧衣ながさわあおいさんという、横手市在住の若いアーティストの方と知り合うことができました。阿仁の伝統狩猟の見学会で初めてお会いし、マタギに密着したテレビ番組の撮影でも何度かご一緒する機会があったので、2021年の秋に阿仁合公民館で開催された永沢さんの個展のお手伝いをさせて頂きました。

永沢さんは狩猟免許を持つ猟師でもあるので、狩猟をモチーフにした作品を数多く発表されています。この展示会では、複数の熊が描かれた幅が6メートル以上もある「山景を纏う者」という新作を発表したので、その作品の設置や分解の作業のお手伝いをしました。北秋田市ではアート系のイベントが限られていることもあり、彼女の迫力のある熊の絵は来場者に強いインパクトを与えたようです。SNSで情報を得て、わざわざ県外から展示を見に来てくれた方々もいました。



永沢碧衣さんの作品「山景を纏う者」

○波及効果でマタギ号の天井画を描く

また、永沢さん本人が頻繁に在廊してくれたので、展示会場がアーティストと地域の方々との交流の場にもなりました。この個展がきっかけで、北秋田市の合川小学校でも永沢さんの作品が展示されることになり、秋田内陸線のマタギ号の天井画が永沢さんに依頼されることにもなりました。狩猟とアートで、地域とアーティストが共に刺激されていたように思うので、その現場に立ち会えたことを嬉しく思います。

○熊鈴付きの御殿まり＝「くまり鈴」の誕生

狩猟とは少し離れますが、「くまり鈴」という名前の「熊鈴付き御殿まり」の開発と販売も行いました。北秋田市在住の親戚が御殿まりの先生をしていたので、その教室に通うようになり、その活動を通じて手まりと熊鈴の組み合わせを思い付きました。

「御殿まり」とは、主に由利本荘市で作られている手まりのことで、色彩豊かな糸から紡ぎ出される美しい模様が高く評価されています。この美しい手まりと熊鈴を組み合わせれば、愛らしさと実用性を兼ね備えた手芸品になるのではないかと思い、御殿まり教室の片山幸子先生に制作を依頼しました。

何回か試作品を作ってもらい、完成した物を普段からよく利用しているCreemaというオン

ラインのハンドメイド・マーケットプレイスで販売することにしました。最初は何の反応もありませんでしたが、秋田魁新報に取り上げて頂いた後の反響は大きく、一時は全ての商品が完売になりました。今は北秋田市のカフェや温泉等の3店舗でも販売してもらっています。



くまり鈴

くまり鈴の開発と販売で印象に残っている点は、制作者の片山幸子さんが地域で注目されたことです。彼女は「てまりの会」というサークルの発起人で20年以上にわたり地域で活動を続けていましたが、その活動が地元のメディアで取り上げられる機会はほとんどありませんでした。「地域おこし協力隊」と「地域の人」が、力を合わせて新しい商品を生み出し、注目されたというストーリーが気に入っています。

また、御殿まり教室で70代半ば以上のご婦人方と一緒に、御殿まりを作りながらおしゃべりする時間も貴重でした。片山先生の親戚という血縁パワーでサークルの仲間にしてもらい、皆さんの日常のお話から人生の予習ができたようにも思います。

○「露熊プロジェクト」に参加

「露熊プロジェクト」という、露熊山峡を復活させるプロジェクトにも参加しました。露熊山峡はかつて秋田三十景の一つに数えられ、多くの観光客が訪れる景勝地であり、地域の子供たちの遊び場でもありました。しかし、人口減

少で人が近づかない場所になり、草木が生い茂り、人を寄せ付けない場所になってしまいました。そこで、地域の宝を住民の手で取り戻すべく、2020年の春に露熊プロジェクトが立ち上げられたのです。



露熊山峡の鍋岩

Facebookを通じて露熊プロジェクトの事務局長にお声掛けしてもらい、2021年の春から月に一回の活動に参加させてもらうようになりました。記録係として写真や動画の撮影を行い、SNSに活動の様子を投稿して、プロジェクトと露熊山峡の知名度を上げるために活動してきました。役所の移住コーディネーターでもある立場を活かして、露熊山峡の散策を移住体験メニューに加えることができたのも、活動の一つの成果であるように思います。

前述の御殿まり教室は「女の世界」でしたが、こちらの露熊プロジェクトは肉体労働の「男の世界」でした。両極端な世界を同時期に行ったり来たりしながら、文化人類学者のようにコミュニティを観察させてもらえたことは良い思い出です。

また、プロジェクトメンバーの若手はほとんどが移住者の「よそ者」だったので、私と彼らの間に「よそ者仲間」のような連帯感が芽生え、人間関係の幅が広がったことも大きな収穫でした。露熊プロジェクトは、若い移住者と年配の地元住民の交流の場にもなっているようです。

○「ローカリティ！」のレポーター

「ローカリティ！」というローカル情報に特化したウェブのニュース・メディアの取材記者としても活動しています。ローカリティ！とは、自分の地元の「人やモノや出来事」を世界に発信する住民参加型のニュース・メディアです。このメディアの「ニュース」の定義は、自分なりの「驚き・発見・感動」です。取材記者としてのノルマは特にないので、業務の合間に取材と執筆を行い、自分のペースで記事を発表しています (<https://thelocality.net>)。

これまでに発表した記事のテーマは、露熊集落にあった鯉茶屋、ご主人がマタギの「ゲストハウスOR I Y A M A K E」、「森のテラス」に新しくできたステーキハウス、マタギが営む^{そま}柚温泉旅館、山の神とオコゼの関係性について等でした。どのテーマも移住者や猟師としての視点が活かしていたように思いますし、取材を通じて地域のことをより深く知ることができているので、楽しく情報発信をさせてもらっています。

過疎地域の「地域おこし協力隊」は何かと注目されることが多く、取材される機会も多いのですが、どちらかと言うと主役は「地域の方」だと考えているので、今後は「取材をする側」の比重を高めていきたいと考えています。

○その他の活動

その他の活動としては、Google mapのローカルガイド機能を利用して、地域にある各種施設の写真を小まめに投稿したり、図書館で若い人の生き方に影響を与えそうな本の購入依頼をしたり、古本屋さんにお気に入りの本を寄付したりしています。

また、地域のお祭りのお手伝いをしたり、中学校の総合学習のアドバイザー役を担当したり、不登校の生徒を対象としたリフレッシュ学園と

いう教育施設の自然体験に同行したりもしていました。お声掛けがあれば、染色ワークショップへの参加や農作業のお手伝い等もしています。

地域おこし協力隊になる前は、学問と文化と都市を愛するスノッブな人間だったので、我ながら丸い人間になったと思います。自分でも意外ですが、子供との対話は本質的な問いが多いので楽しいです。また、最近はC O T E N R A D I O (コテンラジオ) という福岡発の歴史に関するポッドキャストの番組をよく聴いているので、自分もフェミニズムやジェンダー論に関するラジオ番組を配信しようかと考えています。



「森のテラス」で行われた
ダリアの染色ワークショップの様子

3 より良い地域との関係性に向けて

○地域おこし協力隊の多様性

地域おこし協力隊になると、総務省や秋田県主催の様々な研修を受けることになります。そこで他の自治体に所属する協力隊と知り合う機会があるのですが、協力隊になる人の年齢や性別、出身地、キャリア、協力隊としてのミッションは本当に多様です。ある人はSUP (スタンドアップパドルボート) とヨガで地域おこし活動をしていましたし、ある人はバスケットボールで、またある人は山とアウトドアで地域を盛り上げることをミッションとしていました。

地域おこし協力隊の制度は、受け入れ自治体に委ねられている部分が多く、契約のあり方もミッションの内容もその有無も、全て受け入れ自治体次第なのです。

私の周囲では、3年間の任期満了を待たずに地域おこし協力隊を辞めてしまう人が多く、その理由が必ずしもポジティブなものではないので、そのことに心を痛めています。担当職員や地域の人、同僚の協力隊との人間関係に悩み、途中で辞めてしまう事例が多いのです。

○お互いに未知との遭遇

私の存在はこの地域ではとても異質で、扱いづらい人間であると思います。中年女性で未婚だというだけでも不思議に思われるらしく、その理由を何度も質問されますし、同年代の男性をよく紹介されます。世代間のギャップに加えて生活環境が全く異なるので、北秋田市の合川出身の祖母は宇宙人のようだと常々感じていたのですが、ここに住むようになってその謎が解けたような気がしました。

地域おこし協力隊は外部人材なので、Uターンで地元に戻ってきた人以外は異質な「よそ者」です。この異質な存在を飲み込めるかどうか、その地域が将来的に持続可能かどうかの分水嶺になるように思います。

○関係人口を増やすような気持ちで

協力隊の2年目の後半あたりから、役所の担当職員に任期終了後の定住に向けた準備をするように盛んに言われるようになりました。地域の方々からも定住するようにと強めに圧迫されることがあり、そのことを少し窮屈に感じています。定住は就職先次第ですし、起業による自立は簡単なことではありません。地域おこし協力隊は、地方での定住を促進することを意図して設計された制度ではありますが、定住は義務ではありませんし、定住することがその人個人

の幸せには繋がらない場合もあります。

協力隊が定住する道を選ばず、都市部に戻って就職をしたとしても、夏休みや冬休みの時期に通ってくれる存在になれたのだとしたら、それはこの制度の成功事例だと思います。定住率を上げるために協力隊の環境改善を行うことは重要ですが、定住率に拘るあまり、その協力隊を一人の人間として不幸にしないように配慮してもらいたいと思っています。



森吉山にて

<担当者から一言>

北秋田市では平成27年度から協力隊16名採用し、現在は8名の協力隊が活動しております。(R4.10月現在)

外からの視点で物事を捉えることで、これまで北秋田市民が気付かなかった新たな発見や取り組みが多く生まれています。隊員の皆さんは市から与えられたミッション(移住、結婚、観光振興のコーディネート等)を行いつつ、地域を活性化させる取り組みやSNS等での発信など様々な方法で地域を盛り上げるため、日々活動しております。今後も隊員と地域住民が一体となって、活気のある地域を作っていけるよう努めてまいります。是非、それぞれの活動に興味を持っていただきご協力していただければと思います。

(北秋田市移住定住支援室 大野 恭介)